臨床Note 147

臨床ノートは会員などの臨床研究を発表するコーナーです。

気象と病気　風と湿→冷による病

神奈川県保険医協会　小川　勇・恩（小川医院）

「季節の変わり目に、古傷が痛む」とか、「台風が近づいたり、天気が悪くなる前に、喘息発作や関節痛が起こる」とか、「秋口のよく晴れた、冷え込んだ時または、明け方に」とか、「酒を飲んで暑くなり、汗をかいて、気持ちよく、風に当たっていた時」とか、「仕事中や、ハイキング中に雨に降られて、冷えた時」とか、「夏に汗をかいて、心地よく、冷風に当たっていた時」とか、「新築の鉄筋コンクリート造りの家に住んでいたら」とか、以上のようなときに、リウマチ、神経痛、喘息になったなどと、よく聞きます。

これらの病気になる原因は、「風と湿気による冷え」です。

風と湿気（水分）で冷えるのは、冷却機の原理です。次に人一人の発熱熱量で蒸発可能な水分量を計算してみます。人の発熱量は、安静時のEnergy：80 Wを熱の仕事当量（J＝4.19 Joul／cal）で割った値です。その値を、水の気化熱（580 cal／g）で割りますと、0．033 g／secとなります。1時間では、119 g／hourです。発汗しその水分が風により蒸発すると、かなりの熱量が奪われ、人体が冷えることが分かります。

次に、その原因と治療法を、古典医学書である傷寒雑病論に求めます。

傷寒雑病論、金匱説、痙湿暍病第21條の條文によりますと、「この病の原因は、汗が出て風に当たり、或いは久しく、冷える所にいることにより傷られて起こるものである。これは、『風湿（ふうしつ）』という病である。治療には、【麻杏薏甘湯（まきょうよくかんとう）】が良い」ということです。

表　傷寒雑病論　金匱要略

痙湿暍病第二第二十一條

・病者一身盡疼発熱日晡所激者名風湿此病傷於汗出当風或久傷取冷所致也可与麻黄杏仁薏苡甘草湯
・麻黄杏仁薏苡甘草湯方
・麻黄去節半両湯泡甘草一両炙薏苡仁半両杏仁十個去皮尖炒
・右剉麻豆大毎服四銭七水一盞半煮八分去滓温服有微汗避風

〈対象〉

そこで対象として、当院の漢方外来受診者中、喘息または、リウマチ、神経痛、関節痛様症状を、発し、『風湿』と診断された、喘息73例、疼痛45例合計118症例に対し、【麻杏薏甘湯】常用量を投与し、その前後での臨床症状の比較を行いました。

〈成績〉

その成績は、118症例全例で、著効を示しました。

喘息の症例では、加療により、発作症状が消失し、また、発作時刻頃に、暖房をタイマーで入れることにより、薬が要らなくなりました。このことは、暖房により、陽気を補ったためと考えられます。

疼痛症例では、加療により、疼痛症状は、改善し、除湿機で湿度を下げることで、より快適になりました。

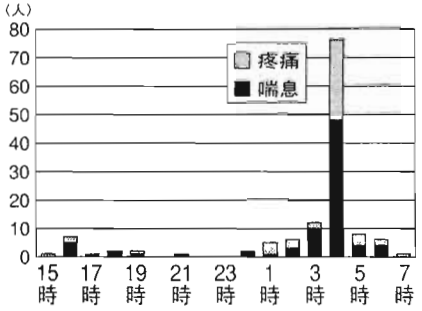
〈考察〉

まず薬味による検討を行います。これらの疾患に使った【麻杏薏甘湯】と、その類似処方である【麻黄湯】と【麻杏甘石湯】との相異を比べると、この三処方は、それぞれに一味づつのみ違うだけなので、同じような病状に使えると考えられます。

【桂枝】は表の陽気の虚を救い、発散を助け、【石膏】は熱を去って、陽気の発散を助け、【薏苡仁】は熱を去り、急を緩げ、調和作用により、陰陽の交代によく順応させると考えられます。先の條文に由れば、『病者の身体中が疼み、発熱し、日暮れに劇しくなるのは、【風湿】と言う病である』とあります。この『日晡所（にっぽしょ）』とは、日暮のことで、午後4時ごろのことです。すなわち、太陽が、蔭ってくる時期です。陽が陰と交代すべく陰陽の変動する時期です。

このように、『日晡所』を陰陽の変動する時期と解釈すれば、その逆の陰が陽と交代する時期も陰陽の変動期ですから、午前4時も、これと同様に考えられます。このように考えれば、この陰陽の変動期は、1日に2回あることになります。また、よく明け方に、神経痛や喘息発作を、起こす患者がいますが、この陰陽の交代期と一致するのではないか？と考え、疼痛や喘息発作の時間的検討を行いました。

疼痛と喘息発作の最大時刻



図のX軸は、疼痛―喘息―発作：最大時刻を、Y軸は、その患者数を表したものです。これによりますと、発作は、午前4時を中心として、前後2時間の幅に分布しています。このことより、発作の時間帯と天の陰陽の交代期とが一致するという結果を得ました。

また、人の血中Cortisol濃度の日周変動を見ると、午前2時最小、午前8時最大、また午前4時には、濃度の一次微分である増加速度、すなわち、変動率が最大となります。この最大変動率を示す時期が、陰陽の交代する時期と一致します。このことにより、明け方の疼痛：喘息発作に血中Cortisolの変動がかかわっていると思われます。

（第17回保団連医療研究集会発表演題より）